

# 全身で感じとる世界

## —ヘレン・ケラー 奇跡の真実—

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

眼が見えず、耳も聴こえず、話すこともできない。絶望的な暗黒と沈黙と孤独のなかで人は生きていけるのか。だがヘレン・ケラー(1880-1968)の著作物を読むと既成のイメージは一変する。

彼女は虚無の荒野をひとり淋しくさまよっていたわけではない。残された感覚を研ぎ澄ませて人々が想像するよりも遥かに深く彩りのある日常を生きていた。懸命に努力して言葉や知識を学び、自立した社会事業家として自己と社会の閉ざされた関係を変えていく。

眼・耳・声の三重苦を克服した奇跡の聖女、神がつかわした天使、人智を超えた存在という偉人伝風の評価は必ずしも正確ではない。過剰な讃辞や感傷の対象ではなく、ひとりの人間として分け隔てのない世界をめざした。

### Waterによる知覚

ヘレンはアメリカ南部アラバマ州の小さな街タスカンビアで裕福な地主の家に生まれた。父のアーサーは南北戦争で南軍の大尉を務めていた。

生後1歳半のとき高熱による髄膜炎を発症し、一命はとりとめたものの、視覚と聴覚が失われ、話すこともできなくなった。好奇心が強く明るく快活な子は手のつけられない獣のように変貌する。

心配した母のケイトは日本の江戸時代の国学者・塙保己一を見習うように言い聞かせた。7歳で失明した塙は挫けることなく学問に励み、膨大

な歴史的文書などの編纂で後世に名を遺した。のちにヘレンは日本に招かれた際、塙にゆかりのある地を訪れて彼の偉業を讃えている。

7歳になったヘレンはますますわがままになり、困り果てた両親は電話の発明で高名なグラハム・ベルに相談する。母と妻が難聴で悩まされていたベルは障害者教育の研究に打ち込んでいた。彼の紹介でボストンにある全米初のパーキンス盲学校から家庭教師を派遣してもらうことになった。

校長は極度の弱視で同校に入学し、首席で卒業した21歳のアン・サリヴァンを推薦する。彼女は光に弱く常にサングラスをかけていた。

アンと出会った頃のヘレンはぼさぼさの髪で食事は手づかみ、自分の気に入らないことがあると癩癩を起し、手足をばたつかせて家族や使用人に怒りをぶつけていた。アンはまずヘレンの手のひらに単語を書いて記憶させる指文字の訓練と共に食事のマナーを教えようとした。食堂の鍵を閉めてふたりだけになり、スプーンを持たせようとして格闘することもしばしばあった。

ウィリアム・ギブソンの戯曲やアーサー・ペンの映画で有名な『奇跡の人』とは生涯の師となる



ヘレン・ケラー

アンのことだ。家庭教師になって1カ月が過ぎた春の日、アンは不機嫌なヘレンを散歩に誘い出す。井戸端のポンプを見つけてヘレンの手に冷たい水を流し、もう一方の手のひらに指でWaterと何度も綴った。その瞬間、ヘレンは言葉で人間の世界が成り立っていることを天啓のように知覚し、Waterと叫んだ。

### この世でいちばん哀れなのは

本格的に発声法を学び、言葉を習得していったヘレンは16歳でケンブリッジ女学院に入学する。しかし教育方針をめぐってアンと校長が対立し、1年ほどで退学してしまう。ふたりはボストンの近郊に家を借りて学習をつづけた。

精魂を傾けて点字と発声法を身につけた結果、20歳で女子教育の名門ラドクリフ・カレッジ、現在のハーバード大学に合格する。在学中に自叙伝『わたしの生涯』を新聞に連載し、ヘレンの名声は高まっていく。本にして出版すると50カ国で翻訳された。卒業後、福祉事業を社会的な使命と自覚し、講演や著述活動に精を出す。

福祉活動を突きつめていくと幾度となく政治の壁に阻まれた。29歳でアメリカ社会党に入党し、婦人参政権運動、第1次世界大戦への反戦運動、人種差別に反対する公民権運動などに参加する。その一方で優生学を支持し、重度障害のある乳児の安楽死を容認する書簡を発表して物議を醸した。1917年のロシア革命を支持し、世界産業労働組合(IWW)の活動を支援するとFBIの要注意人物にリストアップされた。日本への初訪問に際しては特高(特別高等警察)の監視対象となっている。

政治活動に熱心なヘレンに対するマスコミの反応はきわめて冷やかだった。判断力に問題がある、自分で考える力はない、だれかの意見を吹き込まれているといった論調が新聞で流布された。それでもヘレンは「この世でいちばん哀れなのは眼が見えていても未来への夢が見えていない人です」と世間の無関心に起ち向かう。

38歳のときハリウッドで自叙伝を映画化した『救済』に出演する。一種のタレントとして人気が急上昇し、アメリカ盲人援護協会が発足すると募金活動のシンボルとなった。自動車王ヘンリ

ー・フォードや石油王ジョン・ロックフェラーも協力して莫大な寄付金が全米から集まった。

1936年、およそ50年にわたってヘレンに付き添ったアンが70歳で他界する。臨終の間際、日本に招かれていることを聞いたアンは自分のことは気にせず訪日するように言い遣したという。

### ものを見る手で思い描く

翌年、視覚障害者を支援している岩橋武夫日本ライトハウス館長の要請を受けて秘書のポリートンプソンと共に初来日する。皇居前広場で5万人の歓迎集会が開かれ、3カ月半にわたって全国各地を訪問した。講演で「盲目は悲しいことです。けれど眼が見えるのに見ようとしなないのはもっと悲しいことです」「私たちにとって敵はためらいです。自分でこんな人間だと思ってしまう、それだけの人間にしかたないのです」と聴衆を鼓吹してヘレン・ケラー旋風を巻き起こした。横浜港の客船待合室で財布を盗まれたことが新聞で報じられると全国から多額の現金が寄せられた。

第2次世界大戦後の1948年、ふたたび来日し、ヘレンの影響で2年後に身体障害者福祉法が制定され、東京ヘレン・ケラー協会が設立される。1955年、アンの伝記『先生』を出版したヘレンは3度目の訪日を果たし、前年に亡くなった岩橋の家を訪れ、名前を呼んで泣き崩れた。全国各地の講演では『赤毛のアン』などの翻訳で著名な村岡花子が通訳を務めている。

世界中に影響を及ぼしたヘレンは87歳で永眠する。「光の中を一人で歩むよりも闇の中を友人と共に歩むほうがよい」と語り、ワシントン大聖堂の納骨堂にアンやポリートと共に安置されている。

28歳のときに上梓した『私の住む世界』というエッセイ集でヘレンは「私はどんな状況にあっても、その中に充足があることを学んでいます」と書き記している。自分の手を昆虫の触覚にたとえて「ものを見る手」と表現し、触覚、嗅覚、味覚などで世界を体感した。ナイアガラを訪れたときは波が碎ける振動、風のさわやかさ、太陽の温もり、頬を濡らす水しぶきで勇壮な景色を思い描いた。野山を散策して野兎を見つけると小刻みな全身の震えにかけがえのない命を感じた。